

漱石の文学観

杉山和雄

ジェームズによって自己の人生観を作った漱石は、その文学観を構成するにあたってもジェームズから出発した。ジェームズは意識を唯一の実在とし、その継続性と選択性を意識本来の属性とみ、多元的な意識の中から選択された意識の継続を以って、自我の生命としたのである。彼はその選択を決定するにあたって、規準として、Interest (利害関係) をおいた。即ち多数の意識内容の中から、自我の存続、発展に最も有利なものを選び、意識の連続(生命)を形作るというのである。漱石は自己の人生観において、この選択の規準である Interest を理想とみなし、人はあまたの意識の中から、自己の理想に叶うものを選択し、それによって、自己の生命を形成するものだと考えたのである。

「現に我々は毎日或る理想、其理想は低く

もあり小さくもありませう、兎に角或る理想を頭の中に描き出して、さうしてそれを明日実現しやうと努力しつつ又実現しつつ生きて行くのだと評しても差支ないのです。——苟も理想を排斥しては自己の生活を否定するのと同様の矛盾に陥ります。」(文芸と道徳)

彼は自我の働きを知情意の三方面に分ち、知的理想、即ち比較的知に重きをおいて、意識の連続(生命)を形成するものは、哲学者(又は科学者)となり、情的理想に重きをおくものは、文芸家となり、意的理想に重きをおくものは、実行家となるといっている。彼は又文芸家の理想を真善美壯の四つとし、文芸家の任務は、これらの理想を感覚的なものを通して、具体的に表現することである。そのためには技巧が必要で、技巧の働きによつてこれらの理想が読者に還元的感觉を与え、

読者の心に、同様な理想の意識を植えつけることが、文芸家の、従つて、文芸の究極の目的であるといふのである。このように文芸が真善美壯の理想の現われであり、文芸家が真善美壯の意識から成りたつてるとすれば、漱石が「芸術は自己の表現に始つて自己の表現に終るものである。」といつたのは極めて当然なことであつた。そして真善美壯ということは、最高倫理を現わすものであるから、これらを表現するものは倫理的にならざるを得ない。これによって彼の有名な「倫理的ニシテ芸術的、芸術的ニシテ倫理的」という言葉の意味も解決がつく。以上が漱石が自己の人生観から演繹した文芸観の基本であろう。

文学批評においても漱石の立場は一貫して変らなかつた。「文学評論」の中で彼は作品に対する批評家の態度を、次の如く三つに分けて述べている。

第一、鑑賞的態度 自己の好悪のみをもつて作品に対するもので、面白いかつまらないかということを中心とするもの。

第二、批評的態度 好悪を度外において、其作の構造、筋、性格を述べる純然たる科学的態度。

第三、批評的鑑賞的態度 第一第二の中間

にあつて双方を含むもの。

漱石が「文学評論」で実際とつた態度は、この三つの中の批評的鑑賞の態度であつた。そして彼はこの態度について次の如くいつてゐる。

「批評的鑑賞と云ふ態度は何処へ行つても自分の好悪を離れない。何を見ても自己の作品に対する感情から出立するのであるから其標準は何時でも己れにある。又現在の己れにある」。

これから漱石が批評の規準を自己、しかも、自己の好悪においていることが分る。彼は又「文学は趣味の表現である。」「趣味には必ず好悪が伴つて来る。」といつて、趣味とはいかなるものであるかを説明している。その説明によれば、趣味とは「文芸の哲學的基礎」で述べた真善美壯の理想と同じものである。それ故趣味には必ず好悪が伴うといふことは、これらの理想には必然的に好悪が伴うことを意味する。事実漱石は理想とそれに伴う好悪の感情とを、二にして一なるもの、一つのものの表裏をなすもの、理想によつて好悪が現われ、又逆に好悪によつて理想が判定できるものと信じていたようである。

然し、理想が各人によつて異なつてゐる以

上、自己の好悪によつて判定できるものは、自己の理想のみであつて、他人の理想ではない。漱石がこの矛盾に気付いたのは、後のことであつた。彼は明治四十三年に書いた「鑑賞の統一と独立」と「好悪と優劣」という二つの論文において、この矛盾を認め、作品の優劣を決定する場合に、何か客観的、普遍的な規準の必要を痛感しているように見える。がその時も、そのような權威ある客観的規準は見出だされてゐない。好悪の優位は以然として動かなかつた。

「客観の弁説が作の優劣を決するとは云ひながら、其実は既に一個の好悪が早く既に其優劣を決してゐるのである。好悪が優劣に変化せねばやまぬ程主観が強ければこそ、客観的の導線も自然に流出するのである。」

彼が作品に対する態度は、そのまま彼の人生に対する態度であつた。鋭敏な感受性、豊富な知識、適確な判断力、高邁な識見をもつて一段と高い立場から、自己の好悪に従つて人生を觀察し、批評したのが彼の初期の作品であつたといつてよい。「猫」においても「坊ちゃん」や「二百十日」「野分」「虞美人草」等においても、漱石は何処までも、自己の好悪に従つて、世相の評價を試みたのである。

取捨選択も好悪によつて決定し、好むものはあげ、嫌なものはけなし、進んで道徳の維持社会の改良の理想を示したのである。これらの作品が外部に対する自己の表現とすれば、「それから」以後の作品は内部に対する自己の表現といふことができる。共に自己の表現であつて、彼の文学理論の忠実な実行であつた。

明治時代は日本人の自我の自覚の時代であつた。しかし時代がそうであつても、誰れでもが個人主義になるとは限らない。特に、漱石のように、理論に裏付けられた個人主義の人生観を持った人は極めて稀であつた。彼がこのような主義を抱かせたのは、矢張り主として異常に我の強い彼の性格であらう。彼が我の強かつたことは周知のことであり、そのために苦んだことも彼の作品から察せられる。「彼岸過迄」の須永、「行人」の一郎は漱石の分身と考えられているが、須永は自意識の過剰から、一郎は限りのない知識慾から苦しむのである。その救済策として、漱石は松本などの口を通して、自然か芸術品による没我を説いてゐるのである。實際漱石の強い自我は、その反動として、本能的に絶えず没我の境地を慍れていたやうである。明治三十

七八年頃の断片に次のようなものがある。

「昔の人は己を忘れよと云ふ。今の人は己を忘るるなと云ふ。二六時中己れの意識を以て充満す。故に二六時中太平の時なし。

天下に何が棄になると云ふて己を忘るるより鷹揚なる事なし無我の境より歓喜なし。カノ芸術の作品の尚きは一瞬の間なりとも恍惚として己を遺失して、自他の区別を忘れしむるが故なり。是トニックなり。此トニックなくして二十世紀に存在せんとすれば人は必ず探偵的となり泥棒的となる。恐るべし。」

彼が好んで俳句や漢詩を作り、書画を学んだのは、このような境地を求めたためであつたらう。従つて漱石の作品は、上述のような殊更に自我を強調したもの、「草枕」や俳句、漢詩のように没我を主としたものと二種類に分けられる。共に自我を中心としたものであることには変りはない。自然や芸術品に対して、一時的没我の境地に入ることは、何人にとつても困難なことではない。然し社会生活において、人と交際する場合に、没我になることは、至難の業であつて、古来解脱は険しい修道の結果達せられる境地だとせられている。漱石も長年の修養と晩年の禪への傾倒によつて、この境地に近づきつつあつた。

次の漢詩は彼の最後の作である。

真蹤寂寞香難尋 欲抱虚懷步古今
碧水碧山何有我 蓋天蓋地是無心
依稀有月色雜草 錯落秋声風在林

眼耳雙忘身亦失 空中独唱白雲吟
この時彼は「明暗」を書いていたのである。そして「明暗」はこういう意味の彼の没我の文学であつた。

キーツの墓 ④ (68頁よりつづき)

キーツの墓碑銘には、「ジョン・キーツ」という文字も見当らなければ、何才で死んだという文句も見当らない。お隣のセザンヌの墓の方にキーツの名が出てくる。また、キーツの墓碑銘の終りの引用文二行は、じつさいにキーツが死の床でセザンヌに語つた言葉であると伝えられている。

ところで「*writ in water*」であるが、これは「水の上に書かれた」という意味であるか、それとも「水で書かれた」という意味であろうか。これについては一九二六年の英語青年(第八号)誌上で斎藤勇博士がくわしく考証しておられる。斎藤先生の結論は、この表現には両義がある、つまりどちらにもとることが可能である、恐らくキーツ自身は「水の上に」というつもりだったろうが、後には「水で」ととる者が多くなつた、ということである。ついでにつけくわえるなら、シェリー自身はこれを「水の上に」と解釈していたということである。いまひとつのフットノートをつけ加えよう。最初にも記したように、キーツが死んだのは一八二一年二月二十三日である。いくつかのキーツ伝は、キーツが二十三日の朝四時ごろに仮死状態に入り、十一時ごろにセザンヌの腕の中で平和に息を引き取つたとしている。The Dictionary of National Biography のキーツの項にもそのように出ている。(担当者は Sidney Colvin) ところで、碑文で二月二十四日となつてゐるのはどういふことであろうか。

ところが同じDNBで、セザンヌを担当した Richard Garnett は二十四日としている。これは恐らく、碑文の日付をそのままもつてきたのであろう。ところで、さきほどの斎藤先生によると、セザンヌは一八五九年に Charles W. Dilke にあてた手紙の中では、碑銘改訂私案のテキストの中で、キーツの死んだ日を「一八二〇年二月二〇日」としているそうである。セザンヌは一日どころか一年もまちがえたわけで、よけいに驚かされる次第である。

(89頁へつづく)